

災害とソーシャルワークの構造的考察

－実践の価値的な立ち位置の模索－

文教大学 大島隆代 (007322)

キーワード：災害支援、ソーシャルワーク、実践の価値

1. 研究目的

昨今、特に自然災害の発生時後にはさまざまなソーシャルワーク実践が展開されるようになってきており、専門職による被災地での実践事例の提示や、被災地の外から組織的支援として介入する際の体制整備も行われるようになった。災害発生後の救援期にあたる時期には、近接領域ともいえる医療分野でのDMAT（災害派遣医療チーム）の支援体制が構築されている。そこも参考にしつつ、DWAT（災害派遣福祉チーム）などといった専門職による実践のスキルや体制の整備も展開されてきている。

本研究の目的は、そのような背景のもとに、災害支援のあり様を構造化していきながら、ソーシャルワークというものの根源的な価値の側面を考察軸において、実践をよりよくしていくためにはどのような視点や立ち位置が必要なのかを探っていく。

本報告は、具体的な実践事例や調査研究の報告ではないが、報告者が現在まで災害とソーシャルワークの関係性を考察してきたなかで、実践者が行うソーシャルワークの価値の部分に焦点化することで、今後に起きるかもしれない災害に備えて、実践の心構えや立ち位置を示す一助になると考える。さらに、本セッションでは、特定課題についての発表者および会場での議論も期待される。調査研究のみならず、災害時後にソーシャルワーク実践を積み重ねてきたさまざまなかたや組織団体のグッドプラクティスも報告されるであろう。実践における困難や、特に、ソーシャルワーカーとして被災地および被災者への支援に関わる際に揺らいだ思い、それでも支援を続けてきた中で大切にしてきた価値的な視点、さらには、ソーシャルワークの実践者として変容していった支援者自身などについても議論し、災害とソーシャルワーク実践における価値的な固有性を探ってみたい。

2. 研究の視点および方法

本報告では、まず、①特に自然災害とソーシャルワークの関係性をその構造からメタ的に説明し、災害というものの理解の仕方や、そこで議論されるべきソーシャルワークにかんして、実践的側面と理論的側面から示す。そして、②災害とソーシャルワークを考える際に起こり得る困難について、主に、二項対立的な事象や多様な価値観のせめぎ合いなどの事象から考察していく。さらに、③災害とソーシャルワークについて探っていった先述の①②までの作業を経て、今までの実践者が言説的に作り上げていった価値観を構造化し

て示すことを試みたい。以上までの研究作業により、ソーシャルワークの実践における価値的な立ち位置や姿勢を模索していく。このように、ある程度一般化および普遍化された理論や事例の解釈などを通して、ソーシャルワークを実践するにあたっての価値論的な視点を明らかにしていくという方法にて研究する。

3. 倫理的配慮

本研究は、一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理規程に照らし合わせ、各条項に抵触しないことを確認している。本報告では、先行理論の解題をしつつ、一般化および普遍化されるように加工している事例等を研究材料として扱う。特定の個人や団体等に関する情報のデータは取り扱わないため、研究倫理審査を受審しない。また、本報告に関連して開示すべき COI 関係にある企業や組織団体等はない。

4. 研究結果

災害支援が長期化するにあたっての、被災者および被災地のさまざまな生活やコミュニティの課題をみていくと、救援期に焦点化されていた視点や支援手法だけでは対応しきれないものも求められている。救援期以降にソーシャルワークという実践が対峙するのは、災害を起因とした長期化する生活課題や被災に向き合った人びとや地域のあり様であるため、被災者やそのコミュニティのレジリエンスにも注目しつつ、支援手法におけるスキルの向上だけでは、価値的な視点を再考していくことも求められているといえる。

価値的な視点の再考については、例えば、ストレングス視点での対応といったソーシャルワーカーと対象者（被災者）の、特に一個人同士としての、いわばミクロの視点で捉えることのみならず、現象学的な関係性の捉え方や、被災者および被災地への新たな観点などといったものも示唆された。

さらに、現在の専門的実践において自明とされている、「ソーシャルワークのグローバル定義」のなかにも、災害支援とソーシャルワークの関係性を浮き彫りにできるようなエッセンスが含まれていることも明らかになった。実践の遂行において、価値論的な視点を支援者がいかに意識していられるか、また、大切に見つめていられるかが問われよう。

5. 考察

本研究で、災害支援とソーシャルワークを構造的に捉えていくことによって、ソーシャルワーク実践そのものの根源的なあり様も示唆されるということが考察できた。本研究の結果およびセッションでの議論により、災害支援に関わる支援者（ソーシャルワーカー）や研究者が、災害を構造的にどのように理解して支援や研究にあたっていくことが、被災者や被災地を阻害しない実践に結びつくのかを、ソーシャルワークの価値の側面から考えていくことのヒントが得られるだろう。